

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 聞き手領域に対する配慮が言語形式の選択に与える影響
—テクレル・テモラウ及びノダ文・非ノダ文の場合—

氏 名 京野千穂

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、授受補助動詞のテクレルとテモラウ、そして、ノダ文と非ノダ文について、母語話者はどのように使い分けしているかを明らかにする。授受補助動詞とは、「昨日、田中さんに引っ越しを手伝ってもらいました」等のように、他者から恩恵を受けた場合に用いられ、ノダ文とは「実は、昨日引っ越したんです」等のように、文末に名詞化辞ノと断定のダ(デス)が用いられたものである。

本研究では、上記言語形式の構造に基づいた意味(意味論的意味)と、特定の使用場面で生じる意味(語用論的意味)を区別しその異なりを明らかにした上で、その二つがどのように関連するかを明確にする。更に、使用場面で生じる意味は「聞き手への配慮」が動機づけになるとの観点から、語用論的意味を分析した。本研究ではこれらを母語話者への質問紙調査の結果を基に考察する。

まず、テクレルとテモラウについては、「昨日田中さんが手伝ってくれました」のように、第三者に恩恵を報告する場合の「叙述文」と、「田中さん、昨日は手伝ってもらって有難うございました」等のように恩恵の与え手に直接感謝を述べる「感謝文」における使い分けを調査した。前者は構造に基づいた意味論的意味を示すが、後者は使用場面に基づいた語用論的意味へ変化していると仮定し、後者の語用論的意味には聞き手への配慮が伴っているとの仮定を行った。

調査では母語話者に最近恩恵を受けた相手を思い出し、その時の状況を記述してもらった後(叙述文)、与え手にお礼のメールを書いてもらった(感謝文)。その結果、叙述文では、テクレルは与え手自らの行為であった場合に選択され、援助前の詳しい状況記述が伴うことが分かった。一方、テモラウは自分から依頼した場合もしなかった場合も同程度であり、依頼が伴わないテモラウは援助前の詳しい記述が伴わず「結果の状態」を捉えた表現であると分析した。テクレルは主語が与え手であり、テモラウは主語が動作主と受け手という二重性を持つ。この文構造は話者が出来事を捉える順序を写像し、テクレルは与え手から始められた行為を示し、テモラウは主語の受け手から始めた行為を示す。しかし、テモラウの主語が動作主でなく受け手として着目されると、援助行動の「結果の状態」を捉えることになると分析した。

一方、「感謝文」におけるテクレルは、与え手との関係が近く後件が普通体になるのに対し、テモラウは目上の人物や見知らぬ人に用いられ後件は丁寧体を伴う傾向があった。更に、テモラウは経済的援助など与え手の負担が大きい場合に選択されることも分かった。この結果から、使用場面における意味は、関係性や負担等、聞き手への配慮を示すものに変化していると捉えた。また、感謝文では敬語形のテイタダクとテクダサルも見られた。両者は敬語である為に聞き手領域を尊重し侵害しないという配慮は共通する。しかし、テクダサルは与え手の行為に対する話者の驚きが伴うのに対し、テイタダクは話者の謙虚さが伴い与え手領域から遠ざかる態度が顕著であることを論じた。

授受補助動詞テクレルとテモラウの結果から、語用論的意味には聞き手への配慮が関与していることを示した。しかし、この現象が授受補助動詞以外にも適応するかを明らかにする為に、全く異なる一組の言語形式であるノダ文と非ノダ文について母語話者の使い分けを調査した。先ず、同様の内容をノダ文と非ノダ文で示した場合の印象の差を調査した。その結果、「和らげ」、「強調」及び「説明」という全く異なるノダ文に共通し、「聞き手と距離を近づけ熱心に伝達する態度」を示すことが分かった。一方、非ノダ文は「聞き手と距離をとり聞き手領域を尊重する或いは関与しない態度」を表すことが分かった。更に、もう一つの調査では、ノダ文と非ノダ文は「聞き手の領域に情報が存在するか否か」によって使い分けられているかを調査した。その結果、非ノダ文は聞き手領域に情報があり話者も聞き手も確認できる情報である場合に自然と認識され（「私は今あなたと話ていますね」）、聞き手が直接確認することができない場合（話者の私的領域情報等）は非ノダ文による提示が不自然となることが分かった（「私はそう思いますね」）。

先行研究では、ノダ文は聞き手が十分に認識していないことを示すことが指摘されている。しかし、非ノダ文に対する検討は見られない。調査結果から非ノダ文は話者と聞き手の双方が確認できる場合、または、聞き手の情報領域に関与しない場合に用いられることを考察した。更に、非ノダ文との対照から、ノダ文は聞き手の情報領域に関わりを示し、話者と聞き手の情報領域を同一化する志向性を示すと分析した。ノダ文は名詞化（連体形）という機能から、話者以外の所で成立している判断を示すのに対し、非ノダ文は終止形であることから、話者の責任で下した判断や主張を示す。この構造に基づく意味が、文脈や場に基づいた語用論的な推論を経ることによって、それぞれの使用場面の意味に繋がることを論じた。つまり、非ノダ文は話者自身の判断や主張を示すことを主目的とする為に、聞き手の情報領域への関与が伴わず、また、関与を示す必要性のない場合（つまり、聞き手も確認できる場合）に用いられる。一方、ノダ文は話者以外の所でも成立する事態を示す為、本来話者しか認識することができない情報について聞き手に「共有態度」を示すことができる。

テクレルとテモラウ、そして、ノダ文と非ノダ文について母語話者はどのように使い分けられているかを明らかにした結果、①構造に基づく意味と使用場面に基づく意味は異なること、②それらは文脈に基づいた語用論的推論を経て結びつくものであること、そして、③使用場面における意味には聞き手領域への配慮や関与が伴っていることを明らかにした。テクレルとノダ文は聞き手と関わるのが配慮となる場合に、テモラウと非ノダ文は聞き手領域に関わらないのが配慮となる場合に選択されることを示した。